

第5章 支援を必要とする子どもの保育環境

一人ひとりが安心してその子らしさを 発揮できる個に応じた環境の構成

特別な支援を要する子どものニーズは様々です。

まずは、実態を把握し、子どもをあたたくポジティブな目で見ることが大切です。そして、その子の「好きなこと」「得意なこと」を糸口に、個に応じた支援や環境を工夫し、よさや可能性を伸ばしていきましょう。それはその子が「困っていること」への支援にもつながっていきます。

無理に集団に適応できるように保育を進めるのではなく、個に応じた環境をつくることは、決して「特別扱い」ではありません。支援を必要とする子どもが安心して生き生きと過ごせる環境は、他のすべての子どもにとっても過ごしやすいものです。また、支援を必要とする子どもと他児がつながることで、遊びや活動の幅が広がり、保育はより豊かになります。その視点をもって、ユニバーサルな環境づくりを進めていきましょう。



自分が活動する手順や内容がわかる環境

一日の予定がわかる

イラストや写真を用いて、1日のスケジュールを可視化することで、活動の見通しがつき、安心して行動することにつながります。



活動の手順がわかる

身支度が身に付くように、絵カードにして手順を示すことで、必要な身支度を自分で確認しながら進めていくことができます。



できたことはボード裏のボックスに。



表面のボードにカードがなくなれば身支度完了！



手持ちカード

- 必要な時に、必要なカードがすぐに取り出せます。
- 情報が多いと混乱する子どもに、一枚ずつ提示します。

片付け方、場所がわかる

写真を用いて片付け方を示すことで、決まった場所に、自分で片付けることができます。



個人ロッカーの使い方



表紙を前に～絵本の片付け方～

片付け方のモデルを写真などで示し、誰もがものを大切に扱いながら、気持ちよく片付けることができます。「きれいに片付けると気持ちがよい」という感覚を養うことが大切です。

気持ちが落ち着き、安心できる場の確保



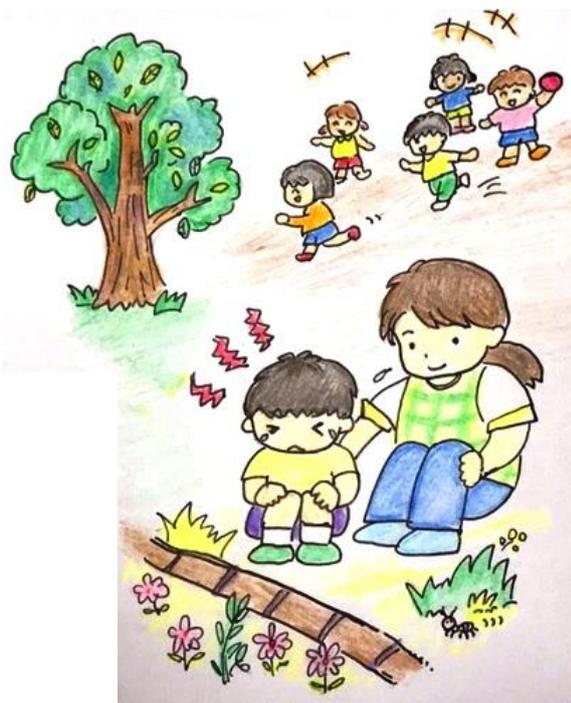
ざわざわした環境や、人がたくさんいる場が苦手な子どももいます。

保育室の一角に、気持ちを落ち着け、クールダウンできる空間があると、集団生活が苦手な子どもも、安心できるかもしれません。

落ち着ける関係づくり

こだわりや予定の変更、自分の意に沿わない出来事など、子どもにとっては、日々の生活で、様々な不都合に出会い、気持ちのコントロールがうまくいかない場合があります。

子どもの思いに寄り添いながら、落ち着いて活動に取り組めるようにすることが大切です。また、子どもが自ら取り組もうとしたタイミングを逃さず、最後まで見守る、そんな安心できる、落ち着ける関係づくりも必要です。



思い切り体を動かして、心も体も成長する ～「にじいろ広場」での環境の構成～

拠点園（わかばこども園、さくらだいこども園、ささはらこども園、みずほ幼稚園、おぎの幼稚園）では、月に1回程度「にじいろ広場」を開催し、個別の支援を必要とする子どもとその保護者が集い、大型遊具などを用いて主に粗大運動を行い、心身の成長を促しています。

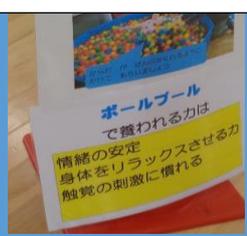


目と手の協応

おもしろそう！
やってみよう！

思わずやりたくなる、体と心を育む
様々な遊び環境

各遊具の側に遊びで
育まれる力を掲示



前庭感覚



固有感覚

やったー！
できた！

遊びの中での成功体験が、満足感と自信、さらなる意欲につながる



体操やふれあい遊び



平衡感覚

いっしょにしよう
たのしいね

親子のふれあいを大切に
保護者同士の交流も



触覚刺激

支援を必要とする子どもの保育環境 チェックリスト

*見てわかる支援(視覚支援)

- 毎日使う道具や教材がどこにあるのか、またどこに片付けたらよいか、見てわかるように表示をしていますか。
- 生活や遊びのきまりが身に付けられるように、ことばだけでなくイラストを提示したり掲示したりしていますか。
- 場面のイメージがしやすいように、見本や具体物を示したり、画像や絵本、紙芝居、ペープサートなどを活用したりしていますか。

*子どもが理解できる話し方や発問、指示

- 状況によって、保育者の話す立ち位置を変えていますか。
- 全体指示の後、必要に応じて個別に説明するなどの配慮をしていますか。
- 一度に多くの指示を出さず、「これから、3つのことを言うよ」など注意を促し、簡潔にまとめていますか。
- ことばによる指示や説明だけでなく、画像や絵など活用し、子どもに伝わりやすいような工夫をしていますか。

*見通しをもち安心して過ごせるような工夫

- 一人ひとりの興味や関心に合わせた遊具を用意し、安心して遊ぶことができる場を作っていますか。
- 一日のスケジュールをホワイトボードに記入したり、1か月の予定を表にしたりして掲示していますか。
- 予定の変更があった時には、できるだけ早くわかりやすく伝え、見通しをもてるようにしていますか。

支援を必要とする子どもの保育環境 まとめ

支援を必要とする子どもの保育環境として、何をポイントに構成しますか？

環境を構成した後、子どもはどのように活動しましたか？



子どもの姿から環境の再構成をどのように考えますか？

あとがき

～子どもの可能性を信じて～

乳幼児期の教育・保育は、「環境を通して行う教育」が基本です。

実際に「環境」をどのように構成していくかについては、第2章で示しているように様々な点を考慮することが必要ですが、何よりも目の前の子どもの実態を踏まえることが重要です。また、保育者が構成した「環境」は、子どもに「これをして遊びなさい。」と押しつけるものではありません。子どもが「やってみたい。」「面白そう！」と興味や関心をもち、子どもが自ら関わるのが大前提です。

準備をした「環境」に対し、子どもが興味を示さなかったり、保育者の想定とは違った活動をしたりすることは多々あります。また、保育者が準備をした「環境」以外の場やもので遊ぶこともあります。しかしながら、それも「子どものありのままの姿」です。保育者が意図した「環境」の構成も大切ですが、想定外の子どもが見つけたもの、関わったもの、遊んでいることも同様に大切に価値あるものです。保育者は常に、目の前の子どもの姿を肯定的に受け止め、柔軟に「環境」を構成し、一人ひとりの子どもの資質・能力の育成に努めなければなりません。

本書で示している内容は、各年齢における「環境」の構成の一例であり、各施設で保育環境に悩んだり、迷ったりした際に参考として活用いただくもので、スタート地点となるものです。まずは「環境」を構成し、目の前の子どもがどのような反応をし、どのように関わるのか、どのような学びを得るのか。また、保育者の構成した「環境」の枠にとどまることなく、子どもが試行錯誤を繰り返し、自分たちで活動を展開していくことを期待します。そのため、各年齢における保育環境のチェックリストにまとめを記入するページを設けています。ぜひとも、「環境」を構成した後、子どもがどのように活動したかをしっかりと見取り、子どもの姿から「環境」の再構成をし、子どもと共に活動や「環境」を創っていくことを目指していただけたらと願います。

子どもは生まれながらにして、環境に関わる力を持っています。私たち保育者は、子どものありのままの姿から学び、子どもの可能性を信じて、教育・保育を推進していき、一人ひとりの子どもが自信をもって小学校へ入学できるよう、精一杯のサポートに取り組んでまいります。

